

日中戦争とアジア・太平洋戦争との関係

日中戦争の全面化がのちの対英米戦争の伏線になったことは確かですが、英米との戦争を不可避にしたのは、1940年（昭15）9月の日独伊3国同盟の締結と、同盟を背景にしたその後の日本の武力南進路線の展開であるといえます。

日独伊3国同盟と日本の武力南進

1940年の春ころ、ドイツはオランダ、ベルギーなどを次つぎと占領し、6月にはパリを占領します。イタリアも英・仏に宣戦布告します。このドイツの勝利にあやかりと日本は、日独伊3国同盟を締結しました。

中国人民の激しい抗日運動での日中戦争の行き詰まりを打開しようと、3国同盟を後ろ盾に日本は武力南進政策を開始します。それは東南アジアに植民地をもつイギリスや、イギリスと友好関係にあるアメリカとの関係さらに悪くしました。

日独伊3国同盟締結記念祝賀会



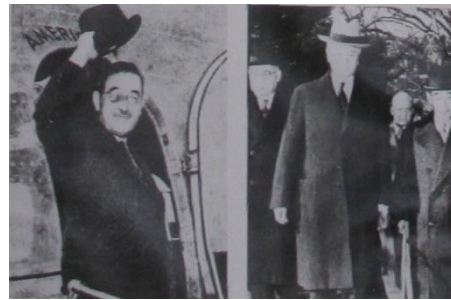
(写真は『写真記録 日中戦争』 4巻ほるぷ出版より)

日米交渉の決裂

そこで日本は、1941年（昭16）4月から日米戦争を避けるための日米交渉を始めました。日米交渉で最大の争点となったのが、日本軍の中国からの撤退というアメリカからの要求でした。これは日本軍部が絶対に同意できない問題のため、交渉はまとまりませんでした。

また、1941年7月、日本政府が南部仏印（いまのベトナム）に進駐したことに對して、アメリカは日本への石油輸出の全面禁止で対抗します。石油の大部分をアメリカからの輸入にたよっていた日本にとって、この禁輸は大きな打撃となりました。

アメリカへ出発の来栖大使



会談に向かうハル（中央）野村（左）来栖（右）

1940年9月、北部仏印（いまのベトナム）へ

すすむ日本軍



(写真左 『日本近現代史を読む』 新日本出版社より)

(写真下 『語り伝えるアジア太平洋戦争』 2巻 新日本出版社より)



(『語り伝えるアジア・太平洋戦争』 2巻新日本出版社より)